06
WA
WA
NEWSPAPER
わわ新聞

人と人との心をつなぐ
コミュニティ新聞
岩手県、宮城県、福島県にて、隔月発行。

1　特集「働く」ことを考える
「仕事」や「雇用」をとりまく現状
4　「わわの輪」
「働く」を築く輪
6　「わわのひと」インタビュー
復興に向かうひととプロジェクト
8　連載「仮設のイーハトーブ」
ボラーノの広場（前編）

東北では「私」のことを「わ」と発音する。
多くの「わ」が大きな「わ=街」をつくりあげる事を願い
「わわ」プロジェクトと名付けられました。

特集
「働く」ことを考える
暮らしのありようとしての「仕事」へ

地域の復興が、ようやく目に見える形を取りはじめ、建設や産業などの活動が徐々に活発になってきている。それぞれの地域でスピードに差はあれ、方向が見いだされつつあることは心強い。以前と同じように、あるいはそこからさらに先に向かって、いろいろなあり方がこの震災をきっかけに見直され、考え直されている。

一方で、個人の生活の復興という視点から考えると、やはり家や道路だけではなく、「仕事」という生活の基盤になるものがあってこそ、落ち着いて未来のことを考えられるということもまた事実だ。雇用面での状況を見てみると、求職側、雇用側双方に、思ったほどにはうまくかみ合って進んでいないという状況がある。被災によって、変わってしまわざるを得ない地域のかたち。それに影響されて、産業や雇用のかたちも以前と同じままではいられない。その変化に個人や企業が対応することにはやはり時間がかかるのだろう。

しかし仕事というのは、必ずしも会社に雇用されるばかりではない。変わっていく地域が必要とするものを見つけそれを自分たちの手で作っていく。いま自分ができることを活かしていくという考え方で始まっている「新しい仕事」へ向かう活動も私たちは各地で見ることができた。

地域の材料で作られた被災家屋の素材から手仕事によるアクセサリーを作る人たち、まちの空間を活かし外部からの来客をもてなす復興民泊、コミュニティの拠点を発展的にカフェへと変えていく人々。自分の仕事を社会につなぐために、ともに勉強して少しでも新しい能力を身につけようとする試みなど。

この特集では、「仕事」について考え、そこに確かな意味をもう一度見つけるためにいくつかの事例にヒントを求めようと考えている。また「仕事」や「起業」にまつわるいくつかの知っておくべきことを整理、紹介する。この特集が各人それぞれの生き方やありように大きな役割を占める「仕事」を考えることを手掛かりに、いつかは終わる仮設住宅に暮らす日々以後の生活を考えることにつながれば幸いである。

岩手・大槌町で活動するNPO法人吉里吉里国では、自然とともに生きる暮らしを見直し豊かな森を復活させようと、林業を学ぶ場をつくり実地作業を繰り返しながら、森との向き合い方を体得していった。　photo：わわ新聞

「仕事」や「雇用」をとりまく現状

インタビュー
いわてNPO-NETサポート
菊池広人（きくちひろと）さん

求人と求職のミスマッチについて

被災地の仕事や雇用の状況について、中間支援団体のいわてNPO-NETサポートの菊池広人さんに現状をうかがった。

「現在、岩手県のデータからも見られるように、したい仕事と募集のミスマッチングが起こっている状況だと思います。もともと沿岸地域は、有効求人倍率がずっと低い状況でありましたし、また生活保護の受給者数は、全国的にも増加傾向にある状況です。この状況をしっかりと共有した中で、雇用対策を行っていかないと、結局『その場しのぎ』になってしまい、長期雇用につながっていかないと思います」

岩手県発表の資料によれば、「求職者が求人を上回っている状況は、『事務』および『生産工程・労務』で特に顕著である。一方で、資格や経験が求められる『専門的・技術』、飲食等『サービス』、及び交通誘導等『保安』などでは、求人が求職者を上回る状況となっている」となっている。

これに対し菊池さんが考える支援は以下のようなものだ。

「お手伝いできることは『地域で必要なサービスの創出』であり、その地域に必要なサービスを提供することでその対価を得る仕組みは、もっと可能性があるかと思います。また、常勤雇用のみにとらわれるのではなく、農業や漁業、子育て等と両立し、お小遣いを稼げる程度の雇用が大きな地域の担い手になると感じています」

大量なモノを多額のお金で売り買いするだけが経済なのではない、もっと身近なお世話をする／されるという交換から始まるという考え方が目指されているのだ。

地域で仕事をすることの原点

「『自分の住んでいる地域がよりよくなるために仕事をする』という目的で、地域の方が働くことによって、よりその地域、団地に合った生活改善ができると考えています。地域住民のみなさんそれぞれが地域を良くしようと思う考え、行動が広がっていくことで、さまざまな地域を良くする事業が自然と生まれ、取り組みが広がっていけばよいと思います」

この「自分の住んでいる地域がよくなる仕事」ということは、自分が住んでいる地域を大切にしたい、だからそれをよくする仕事をしたいという、地域と仕事のつながりの原点に立ち返る考え方でもあるだろう。

「支援員さんのやりがいをたずねると最も多いのが『ありがとう』と言われること。たくさんの『ありがとう』が仕事になる仕組みづくりは、まだいろいろな可能性があると思います」

その仕事の最も確かな価値の表れとしての「ありがとう」。シンプルだが「仕事」について考えるときにとても大切な方針を与えてくれる言葉ではないだろうか。

地元の宝の再評価で世界にはばたく

宮城・雄勝町（おがつちょう）
船越レディース

宮城・雄勝町船越地区の主婦グループ「船越レディース」は、雄勝町特産のスレート石を使ったアクセサリーを制作・販売している。

スレート石は、屋根を葺く瓦として、また硯（すずり）としても使われてきた石だ。雄勝町にある伝統的な家屋の多くはこのスレート葺きだった。スレート瓦は魚の鱗のように一枚一枚弧を描き、美しく屋根を覆って、漁師町の風景をつくってきた。しかし美しかったその屋根瓦は、津波で砕けてしまい、放置されていた。それを見たボランティアグループの人たちが、破片の一部をアクセサリーに加工し、販売したところ好評だったのを受けて、地元の主婦たちに「つくってみたら」と声をかけ、結成されたのが「船越レディース」だった。

仕事は日常を取り戻す作業の一つ

船越レディースは毎日午前8時30分～午後3時まで、船越小学校の3階の一角を借りて制作活動を行っている。船越地区は1世帯を残し、全世帯避難生活を送っているため、メンバーは全員、車で1時間ほどかけてここに集まってきている。

「車で1時間かけてでも、ここで作業することに意味があるんです。時間があるように思われるかもしれないけれど、でもね、私たち結構忙しいんですよ（笑）」と、笑顔でそう話す船越レディースのメンバー・中里好子（なかさとこうこ）さん。口コミの注文しか受けないにもかかわらず、三桁の注文が入り、自宅に仕事を持ち帰ることもあるというから驚く。

船越レディースの仕事は海外でも評価されて、パリのセレクトショップ「メルシー」の協力を得てオリジナルアクセサリーの制作も行っている。それが縁となってストックホルムの布と家具のショップ「スヴェンスク・テン」から、折り紙でつくったクリスマス用の装飾の発売も予定している。それらをつないだのが、建築家の長坂（ながさか）常（じょう）さんとPR活動を手掛けるデイリープレス竹形尚子（たけがたなおこ）さんだ。彼らは、前向きで明るい船越レディースの魅力にひきこまれ、ボランティアとしてかかわりながら、建築・デザイン業界で活動する彼ららしいスタイルで、想いをカタチにして世界へつないだ。

きっかけは、ボランティアのアイデアによる地元の宝の再評価だった。それが彼女たちの手にかかり新たな命が吹き込まれると、さらに縁を呼び、新たな展開が始まった。望んでそうなったわけではない。ただ、日常を取り戻す作業の一つとして、仲間と一緒にコツコツと丁寧に手掛けるうちに、静かに波紋が広がっていったのだ。きっちりと仕事に取り組めば、次が開ける。船越レディースの仕事から、そんな希望が感じられた。

船越レディースの皆さんの作業風景。女性ばかり六人と一匹。女性グループらしく賑やかな雰囲気で作業に勤しむメンバーたち。　photo：わわ新聞

「支配」から「共生」へ

先日、ある治水計画の専門家にダムの話を聞いた。ダムは川を切断するから建設には反対する。どんなダムでも、土砂も流木も落ち葉も全部ため込み、川の物質循環を遮断してしまう。ダムは、いずれ土砂で一杯になってしまう。開発者はそのことを知りながら作り続け、問題を先送りしている。原発だけではなく、巨大なダムも目先の利益のための開発となっていたことを知り、驚いた。また「水田をよく見なさい」とも言われた。一見、水田は緑豊かに育っているが、水田を囲むあぜ道は農薬でやられ茶色になっている。茶色の縁取りの水田を見たら、そこの米は注意しなければならない。

私たちは「水に勝ちすぎた」と複雑な表情で言う。洪水が起きないように、全ての水田に水が行き届くように開拓をし、人間は住みやすくなった。だが結果「自然との共生」のバランスを崩してしまった。「勝ちすぎた」とは、「共生」ではなく「支配」となったことを言っている。おいしいお米を大量に作るために、自然界を支配し続けなくてはならない社会構造になってしまった。

さて、なぜ私たちは仕事をするのだろうか。もちろん、生きていくために必要な事だと思っている。しかし、一生懸命働いた結果、その仕事が環境破壊を進め、生態系を崩す原因となっているとしたらどうだろう。知らず知らずのうちに当たり前だと思っている仕事が「支配」の一部になってしまっていないだろうか。

働くという事、仕事をするという事が、人間だけではない動植物と共に生きるという、大きな社会設計の指針に向かっていなくてはならない。言葉だけではない「自然との共生」をしっかりと設計しなおさなくてはならない。

3・11以後、さまざまな取り組みが各地で始まっている。今回「わわプロジェクト」では、多くの人々に3・11の真意を問いたいという想いのもと、震災復興の活動がいかに始まりどんな効果を生み出したのかを書籍にまとめた。「つくることが生きること」という純粋で切実な想いが自然と共生するためのメッセージとなってほしい。

わわプロジェクト プロジェクト・ディレクター
中村政人

復興支援展覧会本『つくることが生きること』
10月1日発売・アマゾンにて販売予定
2，200円＋税　＊P.8にプレゼントのお知らせ

仕事をもう一度考える

今までの仕事の見直しから、新しく生み出される仕事まで

現地の雇用状況については、人材不足、求人と応募者のミスマッチなど厳しい報道も聞かれます。しかしここでは、あえて「働くこと」、つまり「暮らし方」を問い直し、その結果見えてきたさまざまな仕事、働き方、暮らし方を紹介します。

＊古くて新しい暮らし方・半農半陶＊

カネハ窯・すいと－小石原（福岡・東峰村）

「半農半陶」聞き慣れない言葉かもしれません。農業と陶芸とを兼業する暮らし方のことで、福岡・東峰村の小石原地区ではこのスタイルで生活を成り立たせ、庶民の生活に密着した民陶の一つ「小石原焼」を続けてきた窯元があります。

その一つカネハ窯の熊谷裕介さんは、若手の頭株。稲作と作陶とを生業とする半農半陶の暮らしを実践しています。半農半陶の魅力は、自然にすべてを委ねる農業と、自分の手で作りあげられる陶芸とが暮らしの中でバランスできることだといいます。好きなものをつくり、安心安全な農作物で食事ができて、それらを買ってくれる人との交流で生活が成り立つということに、充足感と喜びを感じる暮らしです。

そんな半農半陶という生き方の素晴らしさ、自然と触れ合う素晴らしさを伝えるために、地元の若手で組織する「すいと－小石原」では、農業体験や陶芸体験、食事や買い物をパッケージにしたイベントなどを開催して、都会で暮らす人たちとの交流を図り、次世代を育成する活動にも取り組んでいます。

ⓘ 福岡県朝倉郡東峰村小石原113
✉ suito-@koishiwara.com　☎0946-74-2203

＊自然とともに生きる暮らし方を探る＊

吉里吉里国（岩手・大槌町）

日の出とともに目覚め、お天道様の下、山で海で田畑で一所懸命働き、夕暮れともなれば家に帰って家族と食卓を囲む。自然とともに生きるそんなシンプルな暮らし方を見直して、地域に合った持続可能な暮らしを営むことを実践しはじめているのが吉里吉里国です。

震災以降、有志で発足した吉里吉里国は、森林整備により生活の糧を得ながら、ゆっくりと時間をかけて、山と海のある豊かな暮らしを再興しようとしています。メンバーは10人ほどですが、最近、地元の若者や沿岸部の被災地域からも新しいメンバーが加わりました。

活動はいたってシンプル。朝森に入り、夕方に帰宅。今、間伐処理は休み、塩害で立ち枯れた木々の伐採と、それらの木で利用できる部分を新や丸太にする加工を行っています。

森や海の恵みのおすそ分けで暮らせる仕組みと暮らし方を現在も模索中だといいます。スローペースなのは、地域に合った持続可能な暮らしをすぐや孫、さらにその先にまで伝えたいと、真剣に考えているから。今日も明日もお天道様の下、吉里吉里国のメンバーは地元の森に向き合っています。（関連記事：P.4参照）

ⓘ 上閉伊郡大槌町吉里吉里3－6－28
✉ kirikirikokumaki@yahoo.co.jp
☎090-7931-5749

＊被災した農村を観光で復興＊

南投県埔里鎮桃米地区（台湾）

1999年台湾・中部をM7.7の地震が襲った「9・21大震災」は、山間部の農村に大きなダメージを与えました。そのひとつ、台湾・南投県埔里鎮桃米地区は、美しい自然に恵まれた地域で、タケノコやバナナなどの産地でしたが、震災で甚大な被害を受け、一時は地区「村」として存亡の危機に立たされました。

その状況に危機感をもった村長や、住民参加型の活動を推進している専門家、観光の専門家らの協力で、住民参加型により、村の宝＝珍しいカエルやトンボが生息する自然を再評価し、新たな産業・エコツーリズムで村を再建させる方向へ舵を切ったのです。

住民自身が、生態解説員の資格取得や民宿経営・伝統料理の勉強会などに参加し、観光業による復興にかかわることで、年間約18000人（2011年桃米地区サービスセンター調べ）の観光客で賑わう村になったのです。観光業の発展により、特産品として地元の伝統工芸も見直され、新たな雇用も生まれました。

環境整備や村内の経済格差をなくすための基金の設立やその管理も住民自身が行うなど、震災以降、村は観光業で持続可能な発展を遂げる仕組みをつくり出しています。

情報提供：国立台湾大学・教授　陳　冬
首都大学東京・准教授　要屋　伸
台湾・南投県政府観光處
photo：要屋　伸

ⓘ 台湾観光協会東京事務所　☎03-3501-3591
http://jp.taiwan.net.tw/（台湾観光局）

＊社会的企業と、担い手の育成を支援する仕組み＊

内閣府 復興支援型地域社会雇用創造事業

内閣府では、被災地での起業と雇用を創造することを目的とした「復興支援型地域社会雇用創造事業」を、今年度末まで実施しています。被災地で「社会的企業（被災地域のニーズに即した新規性のある事業分野に持続的に取り組み、被災地の復興に貢献するNPO等）」の起業と、そうした「社会的企業」を担う人材の育成を支援するプログラムです。

前者は、被災地で社会的企業を起業する方に300万円相当を上限としたヒト・モノ・カネの総合的な支援を行うもので、12の事業実施団体が4月から10月頃にかけて募集している「起業プランコンペティション」に応募し採択されることで、これらの支援を受けることができます。社会性のある新規事業を立ち上げるなどの要件を満たせば、既存の法人でも応募が可能です。

後者は、11の事業実施団体が行う180時間以上の育成プログラムを通して社会的企業を担う人材を育成するもので、座学により社会的企業の経営手法等を学ぶとともに、社会的企業等へのインターンシップ（実地訓練）を行い、現場のノウハウを体得できる仕組みです。2012年8月現在も、各事業実施団体によって募集が行われています。

このプログラムから、新しい社会的企業や、そこで働く人々が巣立ち、被災地における復興の原動力になっていくことが期待されています。

ⓘ http://fukkou.chiikisyakai-koyou.jp/

特集／仕事をもう一度考える

仕事をすること行動すること

インタビュー 働き方研究家・西村佳哲さん

なんのための仕事か原点を確認する

私たちの日常生活のなかには、さまざまな「仕事」が存在している。企業や組織に勤めることや、農業、漁業、林業など一次産業にかかわる人たちの生産活動はもちろんのこと、家事や、日曜大工、家庭菜園の手入れなども立派な「仕事」だ。

「仕事」は、あまりにも日常的な行為なため、転職という機会でもない限り、改めて振り返り、見つめなおす機会もないのではないだろうか。そこを、あえて見続けてきた人がいる。西村佳哲さんだ。西村さんは働き方研究家として、つくる・書く・教えるを自身の生業の三本柱として、著作の執筆、大学や全国各地で行われるワークショップの講師やデザインの講義などを行っている。今春からは、岩手・陸前高田市の復興まちづくり会社「なつかしい未来創造」にもメンバーの一人としてかかわり始めた。

なつかしい未来創造は、地元の中小企業同友会のメンバーとソーシャルビジネス・ネットワークという団体の出会いによって始まった。10年間の時限付き民間企業だ。「気仙沼市や釜石市のような主だった産業がない陸前高田市では、高齢化、人口流出などが震災以前から問題視されていたため、地元メンバーは地域の中小企業の役割について熱心に勉強会を行っていた。「なつかしい未来創造」は、震災後さらに重要性を増した「地域の仕事づくり」をテーマにしている。

「この復興まちづくり会社の目的は、仕事をつくること、出会いを増やすこと、良い社会資本を残すことの三つです。そんな環境と状況をつくり出しておければ、将来の世代の人々が、そのときどきに必要な活動を実現してゆけるだろうと。

たとえば現在、宿泊施設がないので宿をつくろうというアイデアが出たら、それはどんな宿なのか、より具体的に話し合えるようにかかわっています。そこを吟味しておかないと後で「なんでこの仕事をしているんだっけ」と立ち止まってしまう。「この3人でできることは何か」を語り合う時間を重ねてみるんです。気持ちが先走っていると相手の話を聴けないこともあるし、ただの雑談に終わってしまうこともあるので、たとえば時間を区切って互いにインタビューして、相手の話を文章化して戻す。それを添削して、また話し合う。面倒に思うかもしれませんが、たとえばこんな方法をとると、聞けていなかったことも、ちゃんと伝わっていることも互いにハッキリして、その後のコミュニケーションはずいぶん安定したものになります。

お互いの透明度が高まると、やれることがよりクリアに見えると思う。そんな3人から始まった仕事は、ただの宿でもカフェでもない。「あの人たちがやっている」から行きたいし、魅力を感じる場所になります。「人」が価値の中心にある仕事は強いですよ。他の人には真似ができないし、似たものが登場しても価値を失うことはないので」

対立構造にも陥りかねない2人でなく、まず3人で集まって、その人間同士の組み合わせで何ができるかを考える。実際に行動を起こすと、自分たちに何が不足しているのかも見えてくるので、そんなときには目標とする先人に直接会いに行くことも大切だと西村さんは言う。そのような人のもとには、必要な情報や人が集まっているからだ。

「何かしたい」と思ったら、集まる、考える、話し合う、なんでもいい。まずは「仕事」に関するアクションを起こしてみよう。それが、ひいては自分を、周囲を、地域をよりよくしていくことにつながるのだから。

＊「ヨソモノ、ワカモノ」が仕掛ける街、仕事、人づくり＊

石巻2・0（宮城・石巻市）

まだシャッターが下りたままの店舗が連なる石巻商店街の一角に、賑わっている場所があります。ビジネスカフェ「IROHA石巻」は、パソコンを持ち込んで作業ができるビジネスセンターであり、ときにはイベントも行われるスペースです。そこに拠点を構える「石巻2・0」は、地元の若手と、商店街と縁のあった東京の建築家、デザイナーなどが中心になって16もの多様な復興活動をしている組織です。

代表的な活動の一つに「石巻工房」があります。石巻にはなかった、木工を中心にしたものづくりで地域振興を継続的に行っていこうという試みです。

また商店街の空きビルを利用した「復興民泊」は、簡易的に滞在できるように空きビルの一角を改装して、利用料をビルオーナーの現金収入にすると同時に、石巻に人を呼ぶ仕掛けの一つになっています。

石巻2・0のユニークな活動に誘われて、特に都心で暮らす若い世代の中には、石巻に新しく何かを生み出せる期待感、また必要とされているという実感をもてたことで、この街と都心との2居住、あるいは定住する人も現れています。新たな仕事と暮らしが石巻で始まっています。

ⓘ 石巻市中央2丁目10-2新田屋ビル1階
http://ishinomaki2.com/
☎0225-25-4953

＊「縁」の再構築を雇用につなぐ＊

亘理いちごっこ（宮城・亘理町）

震災直後の避難所暮らしは、多くの人たちの心と体に負担をかけていました。そんな状況を改善しようと、昨年5月に立ち上げられた「コミュニティカフェ「亘理いちごっこ」以下いちごっこ」。避難所で暮らす人たちが手足を伸ばせるスペースを用意して、気持ちを軽くしてもらう。そんな活動を続けるなか、住民たちの要望が集まるようになり、自然と活動が広がりました。それは途切れかけていた地元の「縁」を復活させることにもなったのです。

活動の3本柱、有料のカフェレストラン、子どもの学び場・寺子屋、出張カウンセリング・お話聴き隊という活動から見えてきた課題を、最初はボランティアを中心に、今は地域住民が主体となって、仕組みづくりや場を設けるなどで解決方法を見いだしてきています。

今の課題は仕事。いちごっこも15名のスタッフがいますが、今後は「いちごっこ」ブランドで雇用を生みだそうと、地域振興への取り組みを開始しました。

地域の課題に人を介して丁寧に向き合えば、そこに新しい需要がある。それをビジネスとして定着させる仕組みづくりに、いちごっこは取り組んでいます。

ⓘ ☎0223-35-7727
http://watari-ichigokko.blogspot.jp/

わの輪 ver.06

各地域で活動する人やプロジェクトを紹介します。そこから生まれる新しい「つながり」の可能性に期待を込めて。

考える

環境や、コミュニティなどの新しい視点から仕事をもう一度「考える」。地域が必要とする仕事について、あるいは自分が活かされる仕事について「考える」手がかりになるワークショップをする活動があります。

考える
自然と共存し暮らし続けるために
復活の森プロジェクト

吉里吉里の豊かな海を復活させるために、森を蘇らせようという活動。『吉里吉里国　林業大学校』を開設して林業を学び、森林整備のために立ち上がったプロジェクトで、岩手県大槌町吉里吉里の避難所生活を送っていた有志で結成された。厳しくも豊かな自然と共存し、次世代につながる新たな生業を生み出すことを目指している。

特定非営利活動法人 吉里吉里国　http://kirikirikoku.main.jp/

考える
楽しみながらこの地にあるものをつなげていく
森と風の学校

廃校となった学校を再生した場所で、環境共生の精神を宮沢賢治に求め、自然エネルギー、パーマカルチャーを取り入れた環境共生建築、環境教育、エネルギー環境教育、環境共生の地域づくりを実践。またコミュニティカフェの運営や、近年は自然エネルギー、えほん、森づくりをテーマに活動中。

TEL 0195-66-0646　http://www.morikaze.org/

のばす
受講者400名を越える資格取得サポート
重機免許取得プロジェクト

重機免許を取得し、がれき撤去、街や生活基盤の再開発などの復興事業を通じて発生するであろう雇用拡大から、安定的な収入を得るための取り組みとして、被災地での就労支援のサポートを行う。

ふんばろう東日本支援プロジェクト
TEL 050-3638-2860　http://wallpaper.fumbaro.org/licence/

探す
遠隔地に住む若年求職者をワンストップで応援
出前ジョブカフェ

キャリアカウンセリングや就業支援セミナーなど、若年求職者の仕事探しを応援するみやぎジョブカフェが、仙台市から遠隔地に居住している若年求職者の利便性を図るため、県内各地で就職活動に役立つセミナーや個別就職相談を行っている。気仙沼、石巻、塩釜、名取、亘理、大崎、大河原、登米の計8地区で開催中。

TEL 022-217-3562　http://www.miyagi-jobcafe.jp/pc/

探す

仕事と人をつなぐ、仕事の場を探す、あるいは仕事に必要な手立てを探すことをお手伝いする活動があります。

のばす
ITを利用した就労支援プロジェクト
東北UPプロジェクト

日本マイクロソフトと被災地の復興を支援するNPOの協働プロジェクト。雇用の課題解決の為に、ITスキル講習と就労支援を実施し、被災地の雇用可能性の向上を支援している。

ms@sodateage.net　http://www.ms-tohoku-up.jp/

探す
就職して自立した生活を目指す人の相談所
いわて県南パーソナルサポートセンター

専門的なカウンセラーなどの資格を持った経験豊富なパーソナル・サポーター（専門支援員）がハローワークと連携を取りながら、利用者の問題解決に取り組む。相談だけでなく職業紹介も行っている。

TEL 0197-23-6331　http://www.personal-support.jp/

探す
相談者の気持ちに寄り添い、くらしをサポート
あすからのくらし相談室・宮古

岩手県北地区にて、くらし、お金、家族のことなど、困りごとの相談を受けけ、サポートを行っている。専門の相談支援員が、無料、秘密厳守で、親身に対応してくれる。出張相談会も実施中。

TEL 0193-64-2400　http://www.yorisoi.jp/mk/

のばす

それぞれの人がもともと持っていた力を引き出したり、仕事に必要なスキルを伸ばしたりすることで仕事に向かう力を与える活動があります。

考える
“働くこと”を語り合うワークショップ
ハタモク

「働くことの意味や目的が持てれば仕事を通した“生き方”が変わる」を信念に、第一線で活躍する社会人と学生が「何のために働くのか」を気楽に真剣に語り合うワークショップを開催。この活動を通し、自分の意思で人生を選び取っている人は自分らしく働き、いきいきと生きていることが多いと感じているという。

http://www.hatamoku.org/　yora@hatamoku.org

考える 支える
独自のしくみを活用し、明日を創る
一般社団法人CFW-JAPAN

これまで多くの途上国の災害復興で実施され成果をあげた独自のしくみを活用し、被災した人々みずからが復旧・復興のために働き、対価が支払われることで復興を促す支援プログラムを実施。長期にわたる復興を自立的に進めていくために、復興へのコミットメントや生きがいの創出といった側面を重視した活動を進めている。

TEL 070-5668-6370　http://www.cfwjapan.com/

考える のばす
ずっとここで生きていくための“仕事”を創出
南三陸ミシン工房

南三陸町でミシンを届け自立支援を行う「ミシンでお仕事プロジェクト」から誕生した工房。ミシン講習会に参加した女性たちが集まり、買いたいと純粋に思える商品を丁寧に作り続けている。

ミシンでお仕事プロジェクト
TEL090-8745-8946　http://www.mishinkoubou.org/

考える のばす はじめる
今の福島を感じて考えるスタディーツアー
スタ☆ふく

学生団体JASPが企画した福島のスタディーツアー。震災以降、様々な問題を抱えている福島を「だからこそチャンスの場でもある」ととらえ、福島のありのままを見て、感じて、考えてもらうきっかけにと企画された。漁業・観光・農業の各テーマに沿う内容で、地元民との交流を通し、その地域のリアルな現状を知ることができる。

全国学生プロジェクト(JASP)福島支部
3.11jasp@gmail.com　http://watalucky.com/jasp/tour/

「働く」を築く輪

仕事のありようについて考える、いま持っている力をのばすもの、仕事や会社をはじめるための支援、自分の仕事の場所を探す支援、そうして立ち上がった仕事を支える活動などいろいろな活動が各地に見られます。

支える

立ち上がった仕事や、会社、活動を、人のネットワークや資金などを提供したり、あっせんすることで支援する活動があります。

考える 支える
未来へ続く陸前高田を創造する
なつかしい未来創造株式会社

岩手県陸前高田市の若手経営者が中心となり設立した“復興まちづくり会社”。①仕事をつくる、②出会いを増やす、③良い社会資本を残す、この3つを目的とし、複数の事業を育成。将来的に約500名の雇用を創出し、むこう10年間で発展的に解散することを目指している。被災地を体感する子供向けスタディーツアーなどを実施。

contact@natsu-mi.jp　http://www.natsu-mi.jp/

考える のばす はじめる
6次産業起業による復興まちづくり
復興六起

復興まちづくりを担う人財の育成と先導的な社会的企業の事業支援を目的に、被災地域において、農山漁村の6次産業化による起業・新規事業の立ち上げを行う個人・法人を支援。ビジネスコンペ、メンター（財務やビジネスの専門家）による起業家の育成と、復興課題・解決スキルを学ぶインターンシップを実施している。

info@furusatokigyo.net　http://www.furusatokigyo.net/fukkou6kki/

※第6次産業とは、第1次産業の従事者が生産・加工・流通・販売までを一貫して行う事業形態のこと。1～3次産業を組み合わせることで新たな食と農の関連ビジネスを生み出すことを目指す。

支える
三陸の特産品の魅力をアピール
東北クリエイト

日本有数の水産加工の拠点である三陸沿岸地域の特産品で、まだ知られていない商品の掘り起しと販売促進、オリジナル商品の企画・販売を行う。三陸沿岸地域の水産加工メーカーの協力企業、募集中。

宮城県塩釜市海岸通り2-3（矢部園茶舗 内）TEL 022-364-1515

考える 支える
漁師の元気が、街に活気を取り戻す
AD BOAT JAPAN

漁師たちが生き生きと働く日々を取り戻すべく始まった、企業と漁師をダイレクトにつなぐ支援プロジェクト。支援金を漁船の購入資金や事業運転資金にあて、支援を受けた船には、その企業やブランドのロゴが記されるというしくみ。この先何年も続く継続的な復興を目指したビジネスモデルの提案でもある。

http://www.adboatjapan.com/　info@adboatjapan.com

はじめる

仕事を始めるために必要な法律・経済の知識や、人、もの、お金、場所などを提供したり、あっせんして支援する活動があります。

はじめる 支える
復興を牽引するリーダーと挑戦する若者を育成
ETIC

復興リーダーをサポートする「右腕」の募集、「みちのく起業」など、地域の復興支援活動のハブとなる震災復興リーダーと連携し、復興に挑戦する社会起業家やその担い手を育成している。

fukkou@etic.or.jp　http://www.etic.or.jp/

はじめる 支える
つながりが生み出す交流サロン
コミュニティースペース　ファイブブリッジ

組織の壁を越えた個々人のつながりから、地域の活力創出や人材育成を目指して活動する学生、サラリーマン、経営者のための交流スペース。ビジネスセミナーやさまざまなイベントも開催している。

http://five-bridge.jp/

はじめる 支える
宮城の未来をつくる若き担い手たちのコミュニティ
宮城のこせがれネットワーク

少子高齢化、地方の過疎化が進み、地域産業が衰退しつつある宮城で、地域の未来をつくる若き担い手（こせがれ）をつなげ、応援するネットワークコミュニティ。将来に渡り学び合える地域の仲間を増やし、これから地域を応援したい社会人・学生たちが集うことで、楽しく自由な発想で新ビジネスを実践する。

TEL022-721-6180　http://www.five-bridge.jp/kosegare/

のばす はじめる
地元の社会的企業の発展と成長を支援
石巻復興 支援ネットワーク

石巻を中心に、女性、若者の起業を支援するとともに、地元での社会的事業を担い支える人材を育成。ビジネススキルを学ぶことができる「やっぺす！人材育成スクール」の開催や、被災地における起業と雇用を創造するため、社会的企業の起業を支援「やっぺす！起業支援ファンド」に取り組んでいる。

TEL 0225-23-8588　http://yappesu.jimdo.com/

はじめる人のための しごとをつくるQ＆A

これからの東北、これからの日本で、あなたならどんな未来（仕事）をつくりますか？自分で会社や団体を立ち上げるということは、社会の中でさまざまな人たちとつながり、未来をつくるということです。

どんな形態があるの？

A. 共同事業の法人の場合、ざっくりと分けると、利益を追求する営利活動（株式会社など）と利益を追求しない非営利活動（NPO法人など）の2つに分けられます。一般的には、収益事業として将来的に事業規模を拡大したいなら利益法人、収益よりも社会的な意義をアピールしたいなら、非営利法人を選ぶ人が多いようです。自身の起業テーマにはどの形態が合っているか、それぞれのメリット・デメリットを比較してみましょう。

どうやって続けていくの？

A. 起業するということは、それだけの社会的責任を負うということ。とくに法人を設立する場合、数多くの社会的問題を抱える現代社会では、「何のために起業するのか？」というテーマを明確にすることが大切です。そのテーマに関する情報収集や、事業の運営や組織化のノウハウを学ぶ必要もあります。

私でも起業できる？

A. はい、基本的に起業は誰にでもできます。一番簡単なのは、個人事業主になるという方法。すぐに開業できますが、事業に失敗した場合、借金などすべての責任は事業主が負うことになります。一方、共同事業による場合は、「法人（株式会社・NPO法人など）」を設立するのが一般的です。手間はかかりますが、法人税の適応を受けるため、一定以上の収入にならば個人事業より税率面で有利です。信用力・資金調達・従業員採用においても有利と言えます。

どんな準備が必要なの？

A. それぞれの形態によって手続きが異なります。一例として個人事業、株式会社、NPO法人の3例を簡単に紹介します。

①個人事業　：税務署などに事業開始届けを提出
②株式会社　：会社法で決められた手続きを踏む。資本金は1円から
③NPO法人　：特定非営利活動促進法にそってメンバーを揃え、地元の都道府県に申請

岩手県
大船渡市

イタリアンレストラン「ポルコロッソ」店主
山﨑 純（やまざき じゅん）さん

ここに生まれたことを誇りに思う。だから絶対、前よりもい町にする

毎日2000食の食事を避難所に

3月11日、津波は山﨑さんのお店まで押し寄せた。料理などできない状態のなか、山﨑さんは迷うこと間もなく米を買いに走った。集められるだけの米と汲んできた水、そしてロウソクの明かりを頼りにおにぎりをつくりはじめた。しかし、山﨑さんひとりでは60個のおにぎりを握るのが限界。山﨑さんのもとにコックを夢見る高校生や友人たちが集まり、気がつけば60個のおにぎりからスタートした活動の輪は広がり、1日で約2000食をつくれるようになっていた。

「僕らの町は津波で痛い目に遭い、たくさんの命が失われました。阪神・淡路大震災では仮設住宅に入居されてから20名以上の方が孤独死や自殺される方もいたり…。津波だけでこんなに多くの人々が亡くなっているのに、この先ひとりでもそういう方が出たら、ここから先は天災じゃなくて人災です。僕らができることでみんなが少しでも助かるならこの活動は続けていきたい」と取材当日（2011年7月）山﨑さんは語った。

「震災後数日して、紙コップに入れたご飯とカレーを届けたら大の大人が泣くんですよ。家も家族も失って、暖房のない避難所の体育館でも、食事をもらえるのがありがたいって。ある小学校に食事を持っていくと」俺たちは食べているから、あっちの小学校に届けてくれ」と言われた中で、僕が「今日何食べたの？」って聞くと、「朝も晩もおにぎり1個ずつ食べたんだ」って。全然食べてないのと同じなんですよ。僕の町は海も山もキレイなところですけど、それよりも住んでいる人の心が美しい。震災で失ったものもありますが、震災のあとにいただいたものも大きくて、悪いことばかりじゃないなと思いました」

2011年8月末までに約17万食のお弁当が届けられた。
photo：細川 剛

僕らの経験を語り継がなくては

「少し前に、両親の墓参りに行ら、お寺の境内に、昭和9年に建てられた津波の慰霊碑があったんですよ。読んでみると『震災は40年に1度は来る、津波が来たら高台に逃げろ』とちゃんと刻んであった。それを教訓にできていなかったんです。震災の体験をしたこと、そこで得た教訓やノウハウを日本中・世界中の人と共有できるように情報発信ができる場所をつくらないといけないと思います」

先人たちが私たちに残してくれたように、自然災害はいつか必ず来るものであることも、今回の震災がもたらした被害の甚大さも、忘れてはならない。

「津波は来るもの、自然は荒れるものだということを、僕らが忘れていたわけです。三陸の魚介類、野菜、おいしいものをまるごと復活させお届けできるようにすることも、自然とは上手におつきあいしていくことだと思います。100年後でも、キレイな海はキレイなまま次の世代に受け渡す。たとえ田舎でもそのほうが魅力的な町じゃないかと思います」

photo：細川 剛

2011年10月5日にイタリアンレストラン「ポルコロッソ」は再開した。オープン日には、店内に置けないほどの花が届いた。それは山崎さんの店に明かりがつくを多くの人が待ち望んでいたということだ。

「農業も漁業も製造業も全部含めて前よりも絶対にいい町にしなといけない。これから何十年と継続して発展していけたらと思います。少し時間はかかりますが、必ずいい町にしますので、みなさんにはいずれ遊びにきていただきたいですね。三陸の海のもの、山のもの、おいしいものをたくさんご用意できると思います」

愛すべき自分の町の魅力を発信し、情報発信基地になるべくお店を構えていた山崎さん。震災後、その想いはより一層強いものとなり、この町を支える漁業・農業・飲食業・製造業が連携し、継続的に発展するまちづくりを目指している。

山崎　純
イタリアンレストラン「ポルコロッソ」店主
1966年岩手県・大船渡市生まれ。1998年イタリアンレストラン「ポルコロッソ」開業。震災直後、集められるだけの米と水で、おにぎりを握り始める。その後、仲間とともに避難所で毎日2000食の食事をすべての避難所が閉鎖するまで届けた。2011年10月レストランを再開。今後は大船渡の漁業、農業、飲食業、製造業が連携し、継続的に発展していくまちづくりを目指す。

お問い合わせ
〒022-0003岩手県大船渡市盛町字町10-1
☎0192-26-0801
http://porcorosso-web.com

宮城県
塩竈市

東北クリエイト 代表
矢部 亨（やべ とおる）さん

地元を盛り立てる次のアクション 地道な営業活動で取引先を開拓する

人でつながる心の支え

宮城・塩竈市の「矢部園茶舗」を営む矢部 亨さんは、熱い想いを込められるお茶の一杯を求めて、ペットボトルのお茶を買いに走った。集水、そしてロウソクの明かりを頼りにおにぎりをつくりはじめた。しかし、山崎さんひとりでは60個のおにぎりを握るのが限界。山崎さんのもとにコックを夢見る高校生や友人たちが集まり、気がつけば60個のおにぎりからスタートした活動の輪は広がり、1日で約2000食をつくれるようになっていた。

「僕らの町は津波で痛い目に遭い、たくさんの命が失われました。阪神・淡路大震災では仮設住宅に入居されてから20名以上の方が孤独死や自殺される方もいたり…。津波だけでこんなに多くの人々が亡くなっているのに、この先ひとりでもそういう方が出たら、ここから先は天災じゃなくて人災です。僕らができることでみんなが少しでも助かるならこの活動は続けていきたい」と取材当日（2011年7月）山崎さんは語った。

「震災後数日して、紙コップに入れたご飯とカレーを届けたら大の大人が泣くんですよ。家も家族も失って、暖房のない避難所の体育館でも、食事をもらえるのがありがたいって。ある小学校に食事を持っていくと」俺たちは食べているから、あっちの小学校に届けてくれ」と言われた中で、僕が「今日何食べたの？」って聞くと、「朝も晩もおにぎり1個ずつ食べたんだ」って。全然食べてないのと同じなんですよ。僕の町は海も山もキレイなところですけど、それよりも住んでいる人の心が美しい。震災で失ったものもありますが、震災のあとにいただいたものも大きくて、悪いことばかりじゃないなと思いました」

東北クリエイト始動のきっかけとなった、JC時代の仲間がつないだ大分・中津市のロータリークラブ主宰のバーベキューパーティでは、矢部さんが集めた「東北の美味いもの」が振る舞われた

Win Winの関係を築きたい

東北クリエイトで扱う商品は、特産品というからにはオリジナルなものでなければならない。他地域との違いがある魅力的な商品とは何か。震災前に塩竈や三陸沿岸地域を盛り立てるために、積極的にそんな問いかけを普段からしていたかといえば、していなかったと矢部さんは振り返る。だが今からでも遅くはない。道境をバネに、地元の再評価、そして他地域の代替業者に取って代わられてしまい、復興にしてもより込む余地ではなくなってしまっている。そんな状況を打破しようと矢部さんは新たな販路を開拓すべく立ち上がった。NPO法人ではなくあえて株式会社にしたのは、しっかり利益を出すための組織にしたいという考えからだ。昨年5月に発足し、今、まさに船出を迎えたという段階だ。

会社発足にあたっては、矢部さんが所属していた、若手の企業経営者や継承者で組織される公益社団法人日本青年会議所（以下JC）で培った心の通った交流が、大きな支えになったという。

「震災直後、交通手段やルートが限られるなか、いち早くかけつけて、3月当時の初動支援では欠かすことのできなかった灯油・軽油といった燃料からトラックの手配までしてくれ、義援金はもちろん、さまざまな物資も次々と送ってくれた。JCを卒業してもつきあいのあった、全国各地の仲間でした。そんな仲間の一人が、「矢部ちゃん、会社を興すなら手伝うよ」と登記の手続きなどを取り仕切ってくれたんです。ありがたかったですね」

地元特産品の販売促進についても、このように進めていけばいいのか、手さぐり状態が続いたが、やはり力になってくれたのは、かつてのJCの仲間だった。

「大分・中津市に、震災後の現地視察に仲間を募って来てくれたり、義援金を集めてくれたJC時代の仲間がいます。彼は地域密着型のスーパーの経営者なので、その彼を通じて、九州での販路を開拓できないかと今、動き出したところです」

九州で中小のスーパーを経営している企業が、約50社集まって組織している流通専門の企業集団があり、そこで年間、ある程度まとまった取引をしてもらえないかと交渉中なのだという。単発で終わってしまうイベントではなく、継続して取引してもらえるルートの開拓こそが本命だ。

photo：わわ新聞

魅力ある新商品の開発、開拓をするため東奔西走している。

「東北クリエイトでのウリの商品は、仙台ならではの「牛タン」を題材にした商材、三陸沿岸の"殻つきカキ"などいろいろあります。九州では珍しくて、また抜群においしいと評判になるようなものを今も企画中です。取り扱っていただくスーパーの特徴づけ、目玉商品になれるような商品を企画していきたいですね。お互いウインウインでなければ商売は続きませんからね」

しかし、言葉で言うほど容易には進まないのは世の常だ。実演販売など、経費や時間がかかる地道な営業活動が欠かせない上に、矢部さん自身の店舗の経営、そしてこれから始まる塩竈商店街の復興会議など、さまざまな課題がある中なのだ。しかし、矢部さんには「JC時代に築いた「人でつながる」心の支えがある。一歩ずつ、確実に、相手の信頼を得ながら取引先を獲得していく。そんなスタイルが東北クリエイトのオリジナリティになっていくと、矢部さんは確信している。

株式会社 東北クリエイト
この1年で失ってしまった海産物や水産加工品の取引を少しでも回復させようと、日本有数の水産加工の拠点だった三陸沿岸地方の特産品のPR活動や、オリジナル商品の企画・販売などを行う企業。代表は宮城・塩竈市の「矢部園茶舗」矢部 亨さん。矢部さん自身が営業マンとなり、新規取引先開拓のため、東奔西走している。

お問い合わせ
〒985-0002宮城県塩釜市海岸通り2-3（矢部園茶舗 内）
☎022-364-1515

福島県
いわき市

FUKUSHIMA CREATOR's NOTE：WA-KARAMARI 代表
ユアサミズキ さん

忘れてほしくないのは大変な状況であること、それぞれに〝楽しもう〟と動いていること

ステッカーで県外の人たちをもつなぐ

イラストレーター、デザイナーとして福島・いわき市で活動するユアサミズキさんに2011年7月、お話を伺った。勤めていた会社を辞めて独立し、ちょうど1年というタイミングで地震があった。クライアントの多くは地元の企業だが、2011年3月11日以降、ユアサさんを取り巻く状況は一変した。そんなお中、ユアサさんが手がけたあるものが、大きな反響を呼んでいた。それは「がんばっぺいわき」のステッカーだ。

「震災があって1週間ほど経ったとき、ツイッター上で「がんばっぺいわき」というキーワードがかなり出ていたんですね。そんなとき友人が「誰かステッカーつくってみないっ」と。僕が手を挙げさせてもらって、つくることになりました」。制作当初、ステッカーを貼っていた人の多くはいわき市民。しかし、5月になると徐々に福島県外の人から問い合わせが多くなった。それは、地元のために何かしたい」と強く想う、いわき市出身の人たちだった。

「現地ではまだ被災状況が続いています。いわき市外の方に対して、忘れてほしくない、そんな想いで続けています」

最大の支援は機会を与えてもらうこと

つくり手として、自分たちから何か発信できないか？　そう考えたユアサさんは、地元で活動しているクリエイターたちの作品を掲載したオンラインポートフォリオ「Creators Portfolio」を公開。このサイトは「がんばっぺいわき」と「NO風評被害」をテーマに作品を通して地元を盛り上げようというメッセージを発するとともに、地元クライアントの多くが被災し、仕事を失ったイラストレーターやデザイナーが新たな仕事を生むきっかけを生み出す役割も担う。活動は2012年7月（現在、「FUKUSHIMA CREATOR's NOTE：WA-KARAMARI」通称からまり）に発展している。福島県にゆかりのあるクリエイターを対象とした県外、国内外へのアピールの活動としてネット上での作家紹介、作家作品のオンラインショップ、SNSの展開、今後リアルな場でのグループ展等も視野に入れた活動をスタートした。

「僕だけでなく、さまざまなつくり手の人が街に賑わいを取り戻すために、積極的に動き始めています。動くことで、いろんな方に見てもらえる機会ができたり、仕事につながるきっかけになったり。僕自身は、そのきっかけを与えもらっているということが、最大の支援をいただいているという感覚です」

もうひとつ、震災前から取り組んでいる活動がある。4月～11月、月に一度開催されている公園イベント「パークフェス」だ。2009年にスタートしたこのイベントは、いわき芸術文化交流館アリオス前の平中央公園を会場とし、グルマを乗り入れてのショップ出店や地元DJの音楽プレイを中心としたお祭だった。震災そして原子力発電所事故の後、同年内のイベント開催を中止することが決まった。しかし月に一度、実行委員会で集まり2012年再開に向けての議論を続けた。最初のミーティングは公園内の線量を計ることからだった。

photo：鈴木穣蔵

2012年4月。パークフェスは復活した。震災後、一回限りのイベントが多かった中で、月に一度「行けばやっている」イベントを続けていきたかったからだ。イベントは、自然エネルギーによる音響電源の供給、ダンスワークショップ、プチセーターガーデン、各種外部団体とのコラボレーションとった、大規模なものに発展している。

「おそらく、震災前は『福島』という地名すら知らない方もいたと思います。ネガティブな言葉になっているかもしれませんが、今を出発点にしてもっと良くしていかないといけない。大変な状況であることは事実ですが、いわき市でも買い物を楽しんだりお酒を飲んだり、日常生活は普通に営まれています。必ずしもすべてがネガティブな状況だけではありません。もちろん、大変な状況であることは忘れてほしくないですけれど、みんながそれぞれに、楽しみを見つけていることも覚えておいてほしいなと思います」

FUKUSHIMA CREATOR's NOTE：WA-KARAMARI
震災以降、大きく環境が変化してしまった地元福島県出身のアーティストやデザイナーたちの活動の場を自らつくり出すため、国内はもとより海外へも情報を発信すべく、webを中心とした活動。この活動を通じてクリエーターのモチベーションを維持、向上させて、地元の文化・芸術の発展につなげていく。

お問い合わせ
◎FUKUSHIIMA CREATOR's NOTE：WA-KARAMARI
http://wa-fcn.jp/
◎パークフェス　http://ameblo.jp/parkfes-iwaki/
◎がんばっぺステッカー　http://www.mizdesk.com/gbpi/

ユアサミズキさんがデザインした「ガンバッペいわき」のステッカー

宮城県
気仙沼市

リアス・アーク美術館 学芸係長
山内 宏泰（やまうち ひろやす）さん

津波の歴史も地域をつくる文化のひとつ 文化を伝えていく者の責任とは

この地にとって3・11は〝想定外〟ではなかった

宮城県の北に位置する水産都市・気仙沼は、津波とそれに伴う大規模な火災によって甚大な被害を受けた。気仙沼港から西に約3㎞、気仙沼市街を見たらす丘の上に、リアス・アーク美術館（以下美術館）がある。津波の影響はここまでは及ばなかったが、地震の揺れで建物は大きく損傷した。この美術館は、気仙沼市と南三陸町が運営する公立美術館で、主に現代美術を紹介するとともに、1994年の開館以来、地域の歴史民俗系の常設展示室をもち、一般的な美術の定義以外に、地域文化を勉強する場所」として地域に根付いてきた。また、まちづくりに必要な文化資源の専門施設としての役割も担い、津波の歴史も地域文化のひとつ」ととらえ、かねてから津波の文化研究とその普及に取り組んでいた。つまり、山内さんにとって今回の震災は、決して、想定外ではなかったのだ。

あの日、一階で作品の整理をしていた山内さんは、今までの人生で経験したことのない揺れに、間違いなく、とんでもないものが来ると直感した。

「外に出たときすでに駐車場に避難してきている車があり、集まってきた人たちが口々に「6メートルの津波が来る」と言っていました。それから数分後です。津波が見えるというと声がどこからか聞こえてきて、すぐ屋上の端まで走って街を見ると白煙が上がっている状態でした。街がぐちゃぐちゃになっているのは、上から見ていてもはっきりとわかりました」。山内さんは身の自宅を失い、2月を美術館で過ごしながらも、この震災の記録活動を続け、約3万点の写真と約250点の被災資料（いわゆる瓦礫と呼ばれるもの）を収集した。

2006年、山内さんは明治三陸大津波（1896年）の記録を伝える展覧会『描かれた惨状　風俗画報に見る三陸大海嘯の実態』を企画・開催している。

「明治三陸大津波は、北が北海道、襟裳岬、南が福島の富岡町まで到達したという記録が残っているのですが、そこでの被害者・犠牲者の数が二万二千人と言われています。中でも震源が釜石沖だったということで岩手・宮城がやはり相当ひどい被害を受けましたが、われわれが暮らしているこのエリアもとんでもない壊滅的な被害が出ており、それが全部その地名入りで記録が残っているわけです。まさに今自分が暮らしている場所が、かつてそういう災害にあっているという情報が残っていた。それを皆さんに知っておいてほしい展覧会を企画しました」。当初、「さばききれないくらいの来場者が来る」と予想していたが、気仙沼市及び南三陸町の人口10万人に対し、入場者は1200人。学校団体で見学に来たのは美術館から一番近い学校のただ一学年だけ。

『描かれた惨状　風俗画報に見る三陸大海嘯の実態』展より

「相当シュックでしたね。ここまで関心、危機意識がないというのはどういうことなのだろうと。このリアクションを受けて、展覧会が終わったからと言ってこれで終わりにしてはいけない、と強く感じました」

その2年後、山内さんは明治三陸大津波の記録を元にした小説『砂の城』を出版している。その中にこんな文がある。「忘れることは忘れる。伝えるべきことはどんなことがあっても守り伝えつゆく。そういう強さがなければ未来を築くことなどできないよ。それが私たちの仕事、いや、今を生きるすべての人間の義務なんだ。文化を伝えてゆくという事は命を繋いでゆくことと同じなんだよ。」

「去年の震災が起こるまでの間、私が一生懸命やったことの大きな成果というのはなかったと思います。でもそれらをこうやっておいたということが、今回、自分でも少しゾッとするくらい意味がありました。自分にとって、これがいわゆる運命のかなにかになり思っています。今回の震災は、私の中では「災害」というより「文化的な一大事」であり「文化的な転換期」です。そこできちんと踏まえずに次に進んだら、この国は終わりだと思っています。それは恐らく、例えるならば「戦争」。戦前。戦後という言葉がありますが、今後は〝震災前〟〝震災後〟という言葉が使われるようになるでしょう。そこに立ち会っているわれわれは、責任を持たないといけないのです」

photo：わわ新聞

地域復興の「軸」となるリアス・アーク美術館

リアス・アーク美術館は、今、地域にとってなくてはならない存在となっている。「これから復興を行っていく上で、地域が〝軸〟となる文化資源を失っては復旧も復興もありませんぞ。その中で『ぜひこの美術館がふれない軸になってほしい』という要望がいろいろな人たちから出てきました。それは非常に力強くて、われわれにとっての命綱となりました。それは、開館から18年をとなる美術館が、いざというときに掴まるべきものを作ってきたからだと感じています。そして同時に、地域の人たちにとっても、いざというときに掴まるべきものが美術館になってきていたということは、非常に大きいことだと思います。

今、当館では「東日本大震災の記録と津波の凍害を進めています（2013年4月オープン予定）。「私たちは何をすべきことなのか」あるいは「何をしてこなかったのか」あるいは「これからこの国の人たちが暮らしていくこの場所のことを考え、未来へつなげることこそが出来る空間を今後の常設として館の中に位置づけていきます」

リアス・アーク美術館
地域における文化創造活動の拠点施設として、圏域の住民に質の高い芸術文化に触れる機会の提供と、住民の創作活動や発表の場の提供を通じ、芸術的な視点から個性豊かな圏域文化を創造しようとする目的で、1994年開館。展示室（企画展示室・圏域ギャラリー）、常設展や圏域内に内在する文化資源を公開するアークギャラリー、ハイビジョンギャラリー、小規模な個展の場・コモンホール、図書閲覧室、レストラン、ミュージアムショップなどで構成されている。

お問い合わせ
〒988-0171宮城県気仙沼市赤岩牧沢138-5
☎0226-24-1611　E-Mail：postmaster@riasark.com
http://www.riasark.com

連載
仮設のイーハトーヴ

ポラーノの広場（前編）

石神 夏希

こんなところに山羊がいるはずはない。僕は何度も目をこらしてみました。

けれども青い夕闇のカーテンの向こうで仄白く光っているのは、たしかに山羊の固そうに太ったお腹でした。

僕は年取った母の往診に来たお医者の先生を送った帰りで、全身くしゃくしゃになった紙みたいにくたびれていました。ちょうど古い千円札みたいな感じです。別れ際、地元でどうにか見つけた仕事もダメになりそうだと打ち明けると、おじいちゃん先生は少し黙ってから、まだ若いんだから逃げた方がいいんじゃないか、とぼそっと言いました。

でも「どうせもう長くないのだから住み慣れた土地を離れたくない」と言う母を、むりやり東京に連れて行くことは僕にはできそうにありません。頭の中がぐるぐるして帰る気にもなれず、野原に寝転んでいたところにいきなり山羊が現れたのでした。

どの家から逃げ出してきたのだろう？そもそも、山羊を飼っている家などまだこのあたりにあったんだろうか？そういえば、父さんが生きてた頃はうちにも山羊がいたっけ。ぼんやり考えながら野原に座って山羊を眺めていると、思いがけずすぐ後ろから声がして、僕は口から心臓が飛び出しそうになりました。

「この山羊、お前んだろう？」

振り返ると、いつの間に来ていたのか中学生くらいの子どもが、すぐ後ろの樺の木の下に立って、こちらを見つめていました。僕はぎょっとして思わず立ち上がり、こう言うのがやっとでした。

「いや、違うよ。」

子どもはわからないというように首をひねって考えていましたが、また僕の顔を見つめて訊きました。

「じゃあ、ここで何してるの」

とても一言で答えられるような話ではないので黙っていると、その子はほんの少し張りつめた声で言いました。

「もしかして、探してるの」

子どもの目がキラッと光ったのを見て、僕は思わず引き込まれました。

「探してるって、何を。」

「ポラーノの広場。」

「ポラーノの広場？なんだか聞いたことがあるな。何だったかな。」

「つめくさの灯りを数えて行くんだよ」

「ああ、そうだ。野原の真ん中でお祭りをやっている広場だね。昔話の」

「昔話なんだけれど、最近またあるらしいんだよ。そこにはオーケストラもお酒もあって、誰でも歌がうまく歌えるんだって。僕、うまく歌いたいんだよ。だからつめくさの灯りを数えてここまで来たんだ。」

そう言われてみれば、あたりはシロツメクサの花でいっぱいでした。ますます濃くなる夕闇の底で青白く浮き上がったまんまるな花たちは、たしかにぼんぼりのように見えなくもありません。でも、あんまりロマンチックすぎるな。僕がそっと苦笑いしてたばこを吹かしていると、突然その子が高く叫びました。

「あ、たいへんだ。山羊が」

振り返った僕は呆気に取られてしまいました。先ほどの山羊がすぐそばまで来ていて、落としたのを拾ったのかポケットから引っ張り出したのか、僕の財布をむしゃむしゃと食べているではありませんか。

「あ、こら。」

とっさに走り寄ったのが悪かったのでしょう。山羊は財布をくわえて逃げ出しました。子どもがすばやく山羊の後を追って走り出し、僕もあわてそれを追いかけました。

「待て、待て。」

僕たちはずいぶん走りましたが、山羊のお尻はどんどん先に遠ざかっていきます。もうこれ以上走れないと思う頃、向こうに村の外れの柵が見えてきました。僕はドキッとしました。

「だめ、だめだよ。」

けれども遅かったのです。山羊は軽々と柵を越え、子どもも山羊を追いかけて、柵を越えていってしまいました。僕は息が切れて声が続かず、その場に倒れ込んでしまいました。山羊と子どもの後ろ姿は、柵の向こうに広がる誰も住めない黒い森に消えていきました。

夜空には白く爆発した煙のように天の川が流れ、夜露に濡れた草が火照った体を冷やしていきます。激しい呼吸がおさまってきた頃、ふとどこかから音楽のような音が聞こえたような気がしました。

僕は体を起こして、柵の向こうに耳を澄ませました。かすかですが、風に乗って流れてくるのはたしかに音楽です。見れば森の向こうの空がぼんやり明るくなっています。僕は立ち上がり、きしむ体で柵をよじ上りました。

あのときなぜ僕まで柵を越えてしまったのか、今となってはよくわかりません。子どもが心配だったせいもありますが、何より柵の向こうで何が起きているのか、確かめたかったからかもしれません。

つづく

連載「仮設のイーハトーヴ」

東北の精神を表現した宮沢賢治の作品群を下敷きに、仮設住宅地で営まれる、ひとと風土が形作る暮らしを賢治作品の登場人物の姿を借りて描く。それは、風土の忘れかけていた力を呼び起こすこころみであり、また「出口への二年間」をどう生きていくのかという希望に向けたものがたりでもある。

今回の原作は、1934年発表。底本・宮沢賢治『銀河鉄道の夜・風の又三郎・ポラーノの広場 ほか3編』講談社（1971）

執筆：石神夏希（いしがみなつき）・脚本家

劇団ペピン結構設計を中心に脚本・演出家として活動するほか、物語、インタビュー、広告など様々な形で文筆活動を展開している。現代劇の代表作に『東京の米』（2002）『お母さんしかいない国』（2011）など。

挿絵：大野舞（おおのまい）・イラストレーター

旅する絵描き「デナリ」として幅広く活動中。『日本の神様カード』（ヴィジョナリー・カンパニー）、絵本『星つむぎの歌』（響文社）など。2009年毎日新聞にて連載された『もしもし下北沢』（よしもとばなな）で挿画を担当。

次号、特集予定

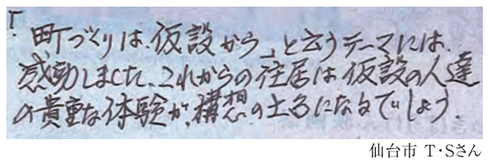
「コミュニティアート（仮）」は、地域の中で地域をつくる創造活動を取材し取り上げたいと思います。アーティストが作品をつくることも、地域や環境からもらった力をまた地域づくりに返すこともどちらも「アート」として考えられます。身近な体験や事例をぜひお寄せください。わわプロジェクトで取材させていただきます。

編集後記

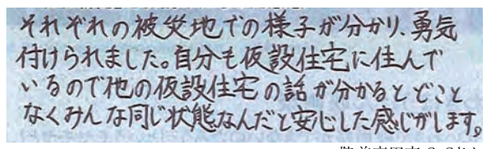
地域とともに、それぞれの人の生活の復興を考えたいと思い、今号の特集を組みました。取材の中で新しい仕事を見つける人もいると同時に、これまでの仕事の新しい意味について気づくということも大事なことだとわかってきました。震災を機に生活の基盤となる仕事について改めて考え、その発見の中に新しい日常が創造されることを期待したいと思います。（新）

ご応募ありがとうございました。

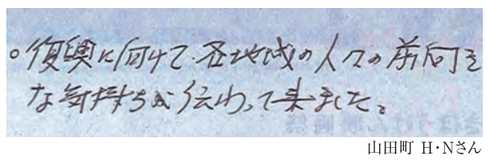
わわ新聞05号「読者プレゼント応募」にいただきました、「わわ新聞」への感想を、一部紹介させていただきます。



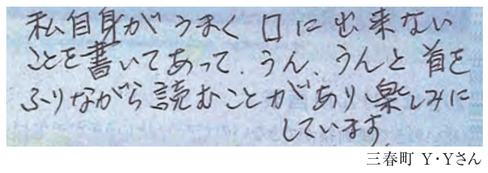
仙台市 T・Sさん



陸前高田市 S・Sさん



山田町 H・Nさん

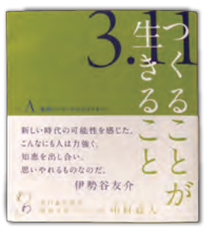


三春町 Y・Yさん

赤い羽根「災害ボランティア・NPO活動サポート募金」助成事業
わわプロジェクトの活動は、平成24年4月より中外製薬株式会社の支援を受けています。

発行元／わわプロジェクト
一般社団法人非営利芸術活動団体コマンドN
発行人／中村政人
東京都千代田区外神田6-11-14-102号室
TEL／080-4150-2550（直通）
FAX／03-6240-1608
メール／info@wawa.or.jp
ウェブサイト／http://wawa.or.jp
編集／新堀 学・澤田 忍・高村陽子
ライター／小西七重
アートディレクター／渡部浩明
デザイナー／小森諭見・廣澤祐子
イラスト／遠藤麻衣
印刷／株式会社 北鹿新聞社

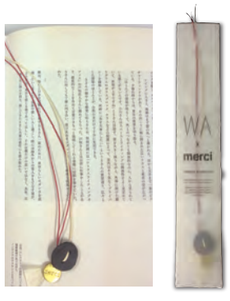
【読者プレゼント】 プレゼントをご希望の方は、応募用紙にご記入いただき、ハガキまたはメール、FAXにてお送りください。＊締切は10月1日（月）［必着］とさせていただきます。また、プレゼントの当選は発送をもってかえさせていただきます。



①わわプロジェクト復興展覧会の本『つくることが生きること』<5名様>

2012年3月に、東京のアーツ千代田3331で行われた、復興支援展覧会「つくることが生きること」の中で紹介された80に及ぶプロジェクトと15人の復興リーダーの肉声、そして会場で行われた熱い議論を収録したボリュームある1冊です。

②アクセサリー「WA × merci A medal of solidarity」<5名様>



P.1で紹介した船越レディースの方々が、パリのセレクトショップ「メルシー」の協力を得て制作しているアクセサリー。メンバー全員の日常再生のお役に立てればと、編集部で購入したものをプレゼントさせていただきます。

③CD「おとのおやつ」遠藤瑞香<5名様>

朝のお目覚めの時に、おやつの時間に、お休み前に…と一日のどの時間に聴いてもホッとできるクラシックのピアノ曲を一枚のCDにギュッと凝縮しました。お楽しみください。

④七人のこせがれ箱<1名様>

宮城県の元気なこせがれ（農業、ものづくりの後継者）7人が作った、卵、なんばん、ハーブティー、ササニシキ、あられ、ハチミツ、てぬぐいをひとつの箱に入れました!

【ハガキで応募】応募用紙をハガキに貼り、以下の住所までお送りください。〒101-0021 東京都千代田区外神田6-11-14 102号室 わわプロジェクト「わわ新聞5号 プレゼント」係

【FAXで応募】ご記入いただいた応募用紙を03-6240-1608までお送りください。

【メールで応募】応募用紙内の項目をメール本文にご記入いただきoubo@wawa.or.jpまでお送りください。

プレゼント応募用紙【ご記入欄】

- ●住所：
- ●氏名：　年齢
- ●電話番号：
- ●希望するプレゼント（いずれかに○をつけてください）
  ① 本　② アクセサリー　③ CD　④ 宮城・銘産セット
- ●『わわ新聞』をお読みになった感想
- ●『わわ新聞』を入手した場所
- ●『わわ新聞』で今後取りあげてほしいこと